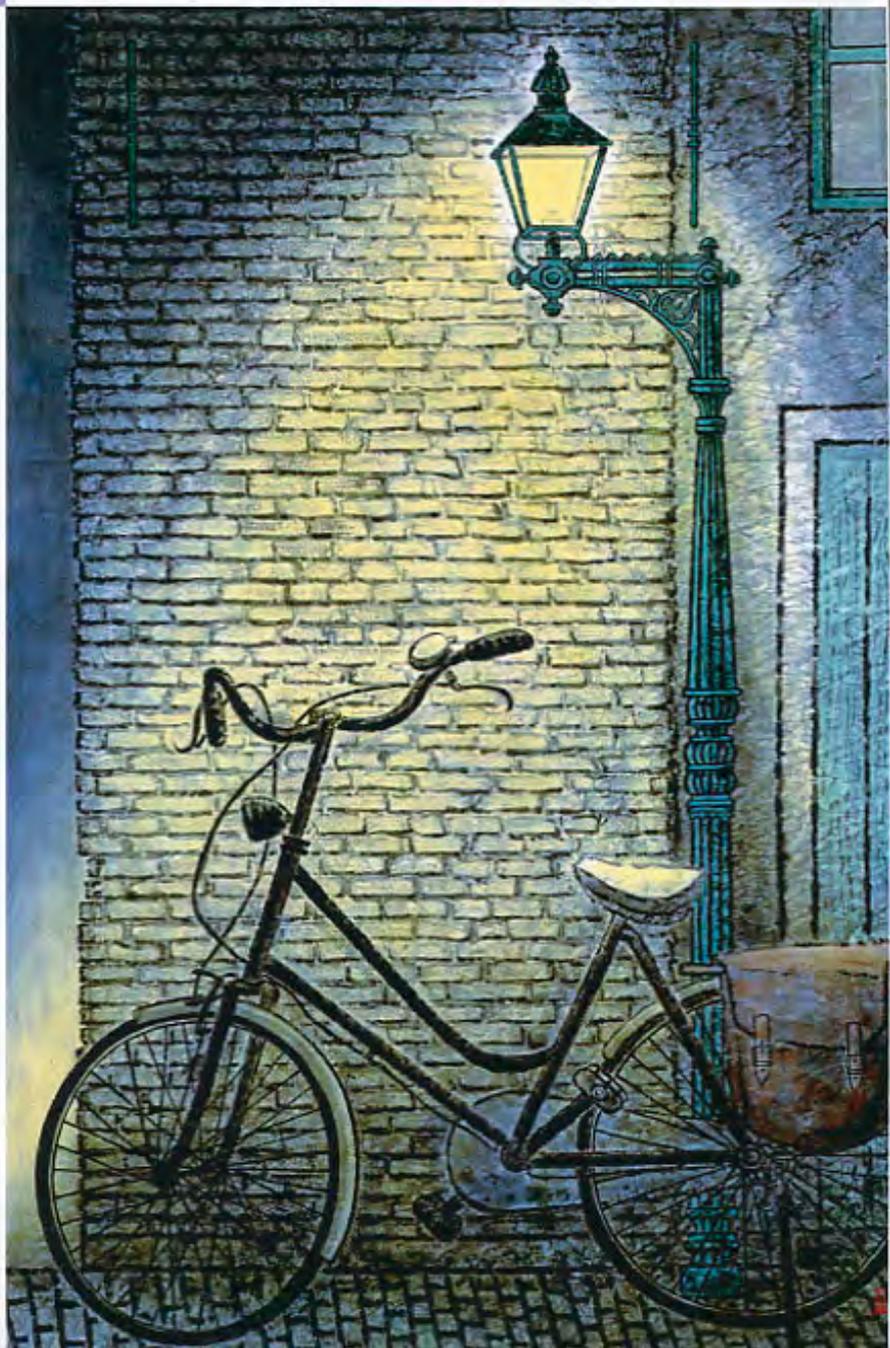


俳

11
2017

俳句雑誌(11)



観世絳

能村 研三

能村庸一さんを悼む

「鬼平犯科帳」などの時代劇のプロデューサーの能村庸一さんが、五月に亡くなった。庸一さんは私のはとこで、庸一さんの父は「沖」にも所属していた能村紫草さんである。父とは年齢も近かったたので、仲の良い従兄弟同士であった。

眠れねば眠らぬでよし虫すだく

衝へ煙草の父の写真や竹の春

秋の灯や考が慣ひの観世絳

屈強な漁師の腕葉月潮

「鬼平犯科帳」などの時代劇のプロデューサーの能村庸一さんが、五月に亡くなった。庸一さんは私のはとこで、庸一さんの父は「沖」にも所属していた能村紫草さんである。父とは年齢も近かったたので、仲の良い従兄弟同士であった。

深井戸は名主の証ちちろ鳴く

縄文の露の大地に藁伏屋

縄文の燃の紋様爽やかなり

爽やかな貝輪か細き古代人

天高し箆笥預金は目減りせる

撓りよき棒高跳びや鶉の晴

「沖」でも周年の記念祝賀会の司会を何度か務めて下さった。先日、青山学院のアイビーホールで偲ぶ会が開かれた。これは生前にご自身で「時代劇大好き！能村庸一物語」と題して自らプロデュースされたもので、当日は鬼平犯科帳の主役を務めた中村吉右衛門をはじめ、北大路欣也、仲代達也、渡辺謙など多くの芸能人が集まった。

庸一さんとは登四郎の十三回忌の時にお会いしたのが最後になった。演劇や映画が好きだった父と対談をして頂きたかったが、それが叶わなかったことが残念である。

庸一さんは父登四郎が眠る延寿寺のとなりのお寺に埋葬されたので、きつと泉下で父と演劇談義をしていることだろう。

蒼茫集



ちりん

大畑善昭

釣鐘人參花のちりと鳴りさうな

*一茎の意志一茎の曼珠沙華

虫の音の波打つやうに引くやうに

蜂に毒青柿に渋増ゆる頃

澄む秋へ弾道ミサイル飛ばす国

桃熟れて

辻美奈子

*桃熟れて桃は完円より丸し

石榴かがやく混沌の裂け目より

縄文風花瓶に秋草の束を

台風のくるむらさきの朝の空

起き抜けの仏頂面や夏休
中学生群なして行く残暑かな

旅ごころ

秋葉雅治

白帽はシェフの象徴秋高し

一期より一会がうれしくつくし

*高層の間を抜け来て秋日傘

爽籟や一途に募る旅ごころ

小鳥来る一果だになき地を埋め

隣家より松茸飯の馨りくる

ぞろぞろ

千田百里

爽籟やチロル・銚釐の韻き似て
川の字の削ぎやうのなし秋澄みて
立待やふと早世の樋口奈津

踊果つ闇のはづれのシヨットパー
*よくもまあ嘘がぞろぞろ烏瓜
竜淵に潜む夜我は飲む寝ぬる

無一物 宮内とし子

秋扇開きて風のなかりけり
現し世の仕掛けのままにぼつたんこ
眩暈てふ身の誤作動や星流る
*島人の深き眉目や台風過
重陽や平均寿命また伸びて
芋の露ぼろりと落ちて無一物

風素秋 甲州千草

作業着の上下繋がり草は実に
*風素秋毛並揃うて来る羊
地卵を買うて色なき風の中
唐辛子の高むる筋力と野性
黄落や彼の好みの街古りて

分乗で帰る良夜の女性客

大運動会 安居正浩

*いくさなど無いといいのに萩ほつほつ
平成の畳に届く大西日
大運動会といふほどでなく終はりけり
一雨に虫の闇から山の闇
海までの距離は知らない曼珠沙華
棹挿すも挿さぬも同じ秋の水

序 列 菅谷たけし

蟬骸歎喜の日々のありしやも
炎帝に仕へて一郷暮しかな
*雷雨急耀歌の峰を呑み込めり
布袋草僧侶に袈裟の序列あり
秋草の荷を解けば生る山の風
天高し大概のこと許せけり

小さき楕円

成宮紀代子

黒板の一行消すや梨出荷

* 小さき円 小さき楕円運動会

今日よりと告ぐ菊月のおしながき

大樟の涼をもとめて七味売

足場組む又足場組む空高し

看護の灯消えてまた点くつづれさせ

案山子翁

森岡正作

夜業の灯消えてまた点く二つ点く

発想の台風圏に巻き込まれる

蒟蒻に遊ばるる箸ましら酒

朝顔や化粧もせずに行つたきり

案山子翁口描かれてもの言はず

* 風呂敷のはんなり解くる秋彼岸

泪もろくて

楠原幹子

若さとは日焼の肌の眩しかり

杉箸のほのかに香り秋はじめ

処暑や今日鏡のかほの他人めき

生身魂まこと柔和なお顔にて

新涼や研ぎ加減みる指の腹

* 泪もろくて枝豆のきりもなし

伏流水

柴崎英子

涼新た墨たつぷりと和紙に浸み

観覧車ゆつくり足裏より秋気

秋気澄み寺領にもらふ伏流水

冷まじや杜に將軍袍衣の塚

* ホツチキスキつちり噛みし野分あと

爽やかや延命治療否に記し

日照雨

松井志津子

日照雨とふ光の粒や夏了る

秋を知る渚伝ひの土踏まず

星月夜 積年の友急逝す

* 冬瓜の処遇人事のやうなもの
稲妻が研ぐ総立ちの波頭
蠟引きて板戸走らす秋日和
「腦ちぢんでいます」全天いわし雲

爽気 藤森すみれ

* 火入れ待つ土器に爽気のありにけり
松手入れ松に一夜の長梯子
効聞きてきゆつと山家の岩魚酒
畑返し日焼なき腕さみしめり
荒使ふ水に命を洗ひ処暑
源流の滴一滴よ夏果つる

星月夜 鈴木良戈

風透る麦藁帽の神田かな
秋めくと立ち読み学生増えにけり
* 秋めくや運河に波の立ちやすく
夏雲の大き帆のごとはためける

射程圏 上谷昌憲

蛇穴に入るミサイルの射程圏
鬼やんま雨中に頭回しをり
稲妻の錐揉みに立つ有楽町
てつぱんに練粉を均す厄日かな
* 大利根の下り鰻のはしきやし
何もかも未完に終の法師蟬

曼珠沙華 河口仁志

わが死後は語る人なし曼珠沙華
遅れ歩のついに一人となる花野
反戦へいま向日葵の叫びかな
牧閉ぢて牛馬の息のしづかなる
桃買つて帰りし家に誰も居ず
帰郷して真つ先き父母の墓洗ふ

潮鳴集



葛 嵐

大沢美智子

秋暑なほ地下錯綜の六本木
びろーどのうぶ毛は濡れず桃冷やす
遠雷のホルンのやうに近づき来
掴みたる錆鮎の喉真くれなゐ
* 由布岳は牛の骨格 葛嵐

敬称略

森村江風

* 闇なくば銀河も詩も耀かず
まさをなる空放りおく野分かな
みちのくの稲田黄金の多色刷
さざ波に眠気手繰らる鯨日和
新酒酌む敬称略の男どち

風 に 彩

七田文子

* かなかなの抒情詩みんなの叙事詩
眉少しなだらかに引く秋はじめ
新涼のたとへば手漉き和紙のごと
仲見世を抜け来る秋の風に彩
秋の灯を一列にして通過駅

水 鏡

石田 静

* ただいまの声が素足の音立てて
水音は父の生家や星涼し
甚平の声やはらかに病癒ゆ
洗ふもの振つて絞るキャンプかな
* 名月のときに瞬く水鏡

鶏小屋

菊川俊朗

* 鶏小屋の鶏の出払ふ厄日かな
秋扇ぱちりと昔語り出す
戻りなむ花野に捉へられぬやう
蛇穴に入るや名主のやうな蛇
鳥の眼に山河は伸びて水の秋

布衣 石崎和夫

岩峰を攀ぢる黒点雲の峰
無花果や蠟涙厚きマリア像
銀漢や布衣の交はり五十年
火の島や紙垂ひかる浦祭
* 始まりは砂の一粒銀河濃し

手を振る 菊地光子

手を振るは生者の別れ星月夜
* 機嫌良き順に落ちたる木の実かな

秋うらら三十種類の野菜表
水門に信号のあり秋の雲
幾つにも分かるる道や鳳仙花

ぬけがら 内山花葉

待つといふ淋しさのあり女郎蜘蛛
キヤッチャーミットの凹みまつ黒夏の果
* 初秋の水平線にほのと佐渡
ぬけがらのやうな昼月種を採る
秋の灯やふるれば胸のうすくあり

背番号 篠藤千佳子

* いもうとの前に生まれて鳳仙花
背番号十八番の案山子かな
露天風呂海とつながる晩夏かな
オルゴールの蓋ゆつくりと星涼し
空缶を袋に詰めて朝曇

沖作品



能村研三選

* 席入りや居前を正す夏袴

大分

大石 恵子

リサイタル余韻にひたる秋思かな
空蟬のはなれがたさや爪深し
東雲や田水を落とす老いの影一
秋茜きよら尼僧の墨衣
故郷を積みて帰省車列をなし
長尺の靴篋届く敬老日
起震車に長き列なす秋日和
* ウエットティッシュ湿り気抜ける厄日かな
ばつた捕りあの直向きさ甦れ
父好きの少女なりけりかき氷
再発も転移もなかり朝の蟬
全快と走り書きあり桃真白
無花果のみしりと熟るる浦日和
* 風の盆衣紋清らなうなじかな

千葉

齊藤 陽子

市川

中西 恒弘

ロックフィルダム白き堰堤秋高し

棚橋 朗

火の山の翠微彩るななかもど
かな文字の和名身に沁むアイヌ墓地

* ひぐらしの声が声呼び黄昏るる

一夜やどりの屯田の街星月夜

木村 美翠

* その杉は父の手植糸よ法師蟬

しののめの水の匂や蜻蛉生る
葉の抱く蕊もろともに散り蓮華

* 霧時雨山の鼓動を隠しをり

高空の雲の白さよ涼新た

西村 渾

* とんぼうとぶつかりさうな草野球

鳥渡る峰に残りし狼煙台

* 潮風の丘の日溜り青蜜柑

山門に零るる日差し涼新た
ふるさとの夢は西瓜の二等分